



本橋 亜美
(もとはし あみ)

日本大学
生産工学部
建築工学科



未曾有の大震災——死者と行方不明者の数はおよそ2万人に及ぶ。

未だ遺体自体見つけることができずにいる方、火葬できず土葬された方、身元不明のまま火葬されわずかな遺品と共に安置されたままの方。死者は安らかに眠ることができるのだろうか。

一方で遺族は最後の対面もできず、一般的な葬儀もあげられず、家族の死を事実と認められない。死に対して‘区切り’をつけられない。

復興に向けて歩き始めた今、改めてゆっくりと死と向き合い、受け入れるための場が必要だと思う。ひとりひとりの死を悼み、お別れをし、安らかな眠りを祈る場所を考える。

自然の中に息づく命に目を向け、過去、未来を見つめ、立ち帰って己を見つめる場所。

心にそっと寄り添って、いつでも思い返すことのできる大切で特別な場所。

講評

桜の頃、ひとりこの建築に至る山道を昇ってみる。
しばらく行くと、真直ぐに伸びるアプローチに迎えられ4つのパビリオンを巡る心の旅が始まる。
陰影のなかの一筋の光に希望を見出し、風の唄を聞き、光粒子の温かさに触れる、木々の木漏れ日の先には生命を感じ、水盤に映る雲は目には見えない大切なものを気付かせる。
祈りの場で研ぎ澄まされた五感は、そこに集う人々の心の記憶の生糸を捉え、様々に紡いで過去・現在・未来を繋げて行く…。
ふと視線を上げると、風に舞う桜の花びらの向こうに穏やかに太平洋の海原が広がった。

作者の繊細でかつ大胆な構成を強い想いが貫いた作品であり、鋭敏な感性が生んだ「鎮魂・希望」の場・建築である。

この建築に捧ぐ

(審査委員：信太 義晴)

